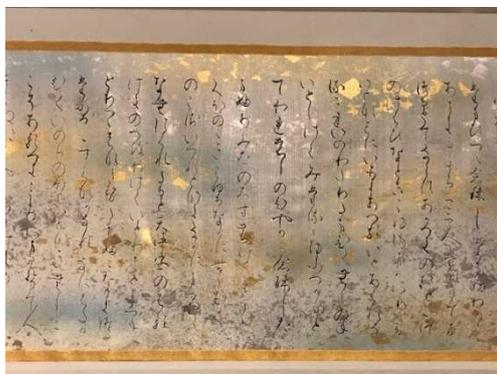


79 源氏物語絵巻 (2021年9月16日)

ギメ東洋美術館は、西陣織で作られた源氏物語絵巻を所蔵しています。全部で四巻あり、それぞれの長さは8mから12mもある大作です。これは、西陣の織物師であった山口伊太郎氏(1901-2007年)が、70歳から105歳で他界するまでの35年の年月をかけて制作し、フランスへ寄贈したものです。今回は、この織物の元となった源氏物語絵巻についてお話しします。



源氏物語は、主人公の光源氏とその一族の恋愛や華やかな宮廷生活をつづった物語です。10世紀末から11世紀初めに生きた作者の紫式部は、結婚してわずか数年で夫と死別し、悲しみを紛らわすために物語を書き始めました。その物語は宮廷で評判となり、紫式部は中宮彰子の女房となり、宮仕えをしながら54帖から成る源氏物語を完成させました。



源氏物語が完成してから約150年後の12世紀後半に、この物語は絵巻物になりました。絵巻物とは、各帖について一つから三つの場面を選んで絵画化し、その場面に対応する本文を抜粋して、絵と文(詞書(ことばがき))を交互に並べたものです。現代に置き換えれば、人気小説の映画化やテレビドラマ化といったところでしょうか。多くの人を惹きつける物語を視覚化したいと考えるのは、古代から変わらないと言えます。

現存する源氏物語絵巻は、日本の国宝になっていますが、紙で作られていますので年月の経過によって色が褪せています(写真右)。しかし、ギメ東洋美術館が所蔵している絹織物の源氏物語絵巻は、色が鮮明で、金糸やプラチナを贅沢に使って光沢があります(写真上)。作者の



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

山口氏は、西陣織で源氏物語絵巻を制作するに当たって、絵巻を復元するのではなく、糸の立体感を生かし、織物に相応しい色使いを考えました。例えば、現存する絵巻では白梅となっていたところを、山口氏はその場面には紅梅が相応しいと考えて紅梅を織りました。後の研究で、当初の絵巻には実は紅梅が描かれていたものの色が褪せて白梅に見えていたことが判明したというエピソードがあります。ギメ東洋美術館で西陣織の源氏物語絵巻をご覧になる機会があれば、その色鮮やかさと緻密な匠の技に注目してください。